地域の医療の担い手を、同窓生と県民との連携で育成する

『地域「里親」による学生支援プログラム』

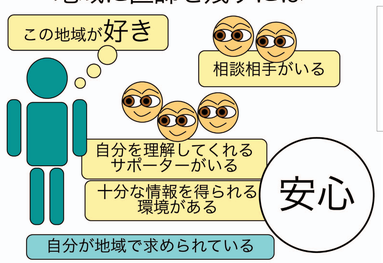
滋賀医科大学

このプログラムは、将来地域での医療を志す医学生を、入学時から地域で活躍する同窓生や地域住民が「里親」「プチ里親」となって支援することで、地域医療に対する関心を持続・発展させ、「自ら望んで地域の医療にたずさわる医療人」として養成し、深刻化する地方の医師、看護師不足の解決をめざす取り組みです。

プログラム立案の背景

～地域の医療の担い手を育て、深刻化する医師不足をどう解消するかが課題となっています。

- 大都市部に医師・看護師が集中し、地方では深刻な医師・看護師不足による社会問題が起こっています。
- これまでの医学教育では、地元地域を意識した教育・学生支援はほとんど行なわれてきませんでした。
- 地域医療に関心のある学生がいても、その「初心」を育み支える支援策がありませんでした。
  （卒業後は「『是非』滋賀県で働きたい」9.4%、「滋賀県で働いてもよい」43.4%・・本学医学生392人調査、H19年12月実施）
- 地域に残ることに不安を抱く学生をサポートする対策が求められています。



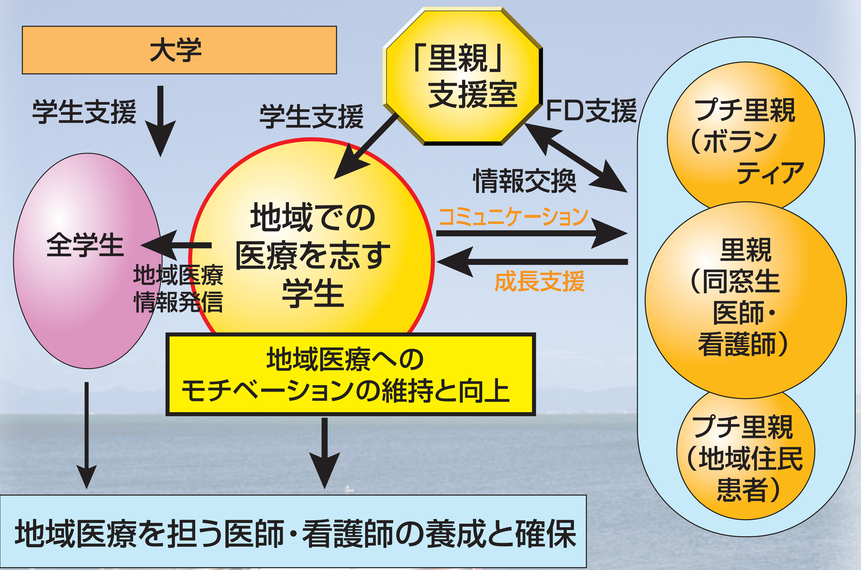
＜地域に残ることの不安＞
地方大学の地域性の低下
医療スキル獲得に対する不安
サポート体制不備による孤立の不安
オーバーロード、オーバーワークへの不安・不満

期待される効果

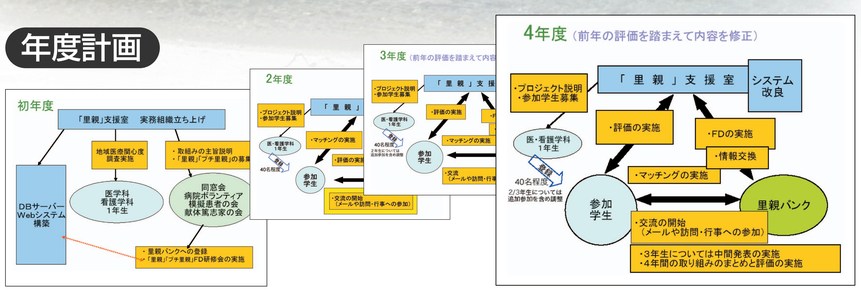
～大学と地域が連携して、学生のニーズと地域のニーズを結びつけます。

- 「里親」「プチ里親」との交流を通じて地域への愛着を増し、地域医療への関心を持続向上させ、滋賀県で活躍する卒業生をうみだすことが期待できます。
- 学生の人間関係における経験を豊かにし、優れた医療人となるための態度形成が期待できます。
- 「里親」「プチ里親」と連携交流することによって、学内だけでは発見できない学生支援の課題に気付いたり、教職員の能力向上が期待できます。
- 補助期間終了後も学部教育の一環と位置づけ継続的に取り組むことで、地域の医療を担う医療人の供給体制の確立が期待できます。

地域「里親」医学生支援プログラム



年度計画



取り組みの独自性

～大学と地域が連携して、地域医療を志す学生の初心を育むための支援を行ないます。

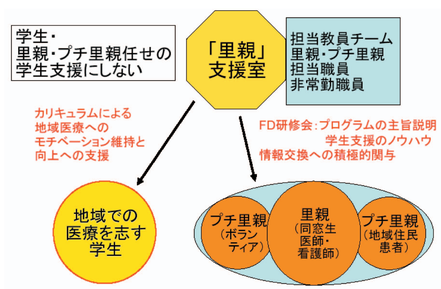
■里親バンク

里　親　県内で働く同窓会の医師624名と看護師139名の中から趣旨に賛同される方

プチ里親　病院ボランティア（50名）、模擬患者ボランティア（20名）、献体篤志家組織「しゃくなげ会」の会員と家族（1345名）、および広く県民の中から趣旨に賛同される方を募ります。

- 関心のある診療科や所属クラブなど、学生の特性とマッチングさせて里親を選びます。
- まずメールのやりとりから始めて、春夏冬休みには里親を訪ねて直接交流を図ります。
- 「医学概論Ⅰの早期体験学習」「自主研修」「社会医学フィールド実習」「学外（地域）臨床実習」などで、里親、プチ里親の下で長期体験実習が行なえるようにします。
- 里親、プチ里親が講師として全学的な教育にも関われる機会を設けます。
- 「学生理解」や「学生指導法」などについて、里親、プチ里親も参加できるFD研修を行います。また、インターネットを利用してFD研修を受講できるようにします。（「今どきの学生」に関するFD研修会　H20年1月28日開催）
- 教職員だけでなく里親やプチ里親を支援員として「里親」学生支援室を設置します。

「里親」支援室の役割



「里親」学生支援室の実務

「里親バンク」の構築・維持、学生と里親・プチ里親とのマッチング
学生からの成果・感想・要望と里親・プチ里親からの記録・要望の収集と提供
分析評価とプログラム・カリキュラムへの反映